基調講演

インド仏教の変容

パンニャ・メッタ・サンガ理事長、インド禅定林住職
サンガラトナ

おはようございます。ただいまご紹介にあずかりました、パンニャ・メッタ・サンガ協会の理事長をさせていただいております。また、インドにおいて禅定林というお寺の住職をさせていただいております、サンガラトナ・マナケと申します。よろしくお願いします。

本日は龍谷大学での「日本仏教に未来はあるのか」ということで、私のようなあまり研究に携わっていない人間がここでお話しするのは、とてもおこがましい話だと思います。また、本日ご出席の仏教学の諸先生方の前で、学生時代にご指導いただいた先生方の前で、私のような浅学がお話をさせていただくというのは、とてもおこがましいことだと思います。しかしインド仏教の現状ということで、私たちが普段インドの中でやっております活動の中でのインド仏教の現状、あるいは私たちが目指しております今後のインド仏教の将来ということで、研究ではなく、実践活動の中でのお話をさせていただきたいと思います。

皆さん、ご存じのように仏教は2500年前にインドで発生したという事実、あるいはお釈迦様がインドでお生まれになられた事実、これを知らない方はどなたもおられないと思います。しかし現代のインド仏教がどうなっているかということをご存じの方というのは、ほとんどいないかと思います。

仏跡等へ来ていただきますと、インドの仏教という風潮がないわけでもありませんが、仏跡で見ていただく現状がインド仏教の実情である、ということでは決してありません。たくさんの方々に仏跡に来ていただきたい。あるいはお商売のこともありますので、そういった関係で、なんとなく仏跡の状態がインド仏教の状態だと捉えられがちですが、今のインド仏教は仏跡で見ていただくような仏教では決してありません。

約800年前までは、インド全国を仏教が網羅したといっても過言ではないかと思います。しかし800年ほど前に、歴史上はイスラム教の侵略およびヒンドゥー教の内面からの破壊ということで、ヴィクラマシーラ大学の崩壊をもってインド仏教の崩壊ということになるのです。私は実際インドの中で生活していて思いますには、800年前の状況を考えますと、仏教はそれ相応の力を持っていたにもかかわらず、どうしてインドで崩壊してしまったのかということであります。釈尊と同じ時代に生まれたマハヴィーラという方がジャイナ教という宗教を開かれました。伝播の地域あるいは生きておられた時期はほとんどお釈迦様と

同じ時代であり同じ場所でありますが、800年前に仏教のほうが力があって、ジャイナ教のほうがもっと弱小的な立場でしかなかった。にもかかわらず、イスラム教、あるいはヒンドゥー教の侵略によって、仏教は絶滅ではありませんがほぼ絶滅してしまう。

それに引き換え、弱小チームとして成立していたジャイナ教のほうが厳然と、2500年前と形態は多少は変わっているのでしょうが、いまでも継続しております。同じ時代に生まれ、内容が少し違いますが同じように戒律を守り、同じような思想でもって継続してきたジャイナ教は、いまだ現存しており、仏教が800年前に崩壊、倒壊してしまったその原因を考えてみると、どうも仏教のほうにも原因があったのではないかということを最近、インドの中で生活しておりまして、つくづく考えさせられる部分があります。

絶滅といいますが、決してインドから絶滅したということではありません。カルカッタを中心とする東ベンガル地方がありますが、こちらがミャンマーと接している関係もありまして、そこから出たり入ったりするかたちで、東ベンガルを中心に2500年前に成立した仏教がそのままに今でも奉じられている。ただ、そこで本来の仏教が奉じられているかというと決してそうではなくて、どちらかというと宗教儀式をつかさどるための仏教に変形しつつ、東ベンガル地方で継続しております。

またラダック地方、いまダライ・ラマ猊下が住んでおられるダラムサラ、あの辺りにも仏教が存続していますが、これは2500年前からの継続ではなくて、700年位前にチベットから逆輸入したような状態の仏教がラダック、あるいはダラムサラというところで奉じられております。

しかし、インドという広大な土地、あるいは膨大な人口、社会を考えますと、東ベンガルの仏教であろうが、あるいはラダック地方の仏教であろうが、社会や国を動かすには何らの力も持っていなかった。特に北インドのダラムサラやラダック地方の仏教は、どちらかというとヒンドゥー教と相まみえた状態の、もともとチベット仏教がそういった形態を持っていたためにヒンドゥー教と何となく似たようなかたちの、あるいは、一心同体とまではいきませんが、それに準じるようなかたちで生存しております。それはインドという広大な土地、あるいはインドという大きな人口の中では、ほとんど力がない。あるいは社会に何ら影響を及ぼさない。わずかな人口の仏教徒に対しては多少の影響力を持ちますが、社会に対しては何ら影響を持たない仏教が現存しております。

また、ジャイナ教と仏教の比較ということになりますが、私がここで申し上げるまでもなく、皆様方は仏教の研究をしておられますので、800年前に仏教はインドからイスラム教、あるいはヒンドゥー教の関係でなくなったということですが、いまも仏教がそうなりつつあるのではないかという危惧を持った状態で当時を考えるのです。

僧侶の社会と在家の社会が一つになって、仏教という形態を築いていなかった。インド人というのは、宗教に限らず割と言語的な遊びを好む民族です。そういう民族性もありまして、僧侶たちはブッダが説いた本来の仏教を研究する、あるいは問うというよりは、言

葉遊びとして仏教の研究をするようになりました。思想的なことも仏教本来の思想ということではなくて、その時代時代の僧侶方が説かれる内容が仏教として伝播していったような、一つはそういう思想的な面でいびつな状態がありました。

またもう一つは、山里など人里離れたところで僧侶たちが生活し、ほとんど民衆、在家の方々との疎通がなかったがために、仏教という社会形態に僧侶と在家の間の大きな隔たりができた。そしてその中で仏教の内部そのものに亀裂が入り、そういった亀裂が発生した状態でイスラム教、あるいはヒンドゥー教の侵略ということで仏教が絶滅したのではないかと私は思っております。

約800年間、インドは仏教不在の時代をずっと継承してきました。それが今から57年前に、もう一度仏教復興という兆しが出てきました。それは、インドは約4000年位前からカースト制度という、生まれによっての身分制度が現存しております。法律で禁じられていますし、あるいはまた諸外国に対して母国の恥じる部分を表立たせたくないということで、インドの中にはカースト制度はないということになっていますが、実際に私たちのように生活しておりますと、当たり前に、普通にそういった現状の中で生活しているのが事実であります。皆さん方、外国から来られたような方はお気付きにならないと思いますが、私たちが日常生活の中で多々そういったことを感じることがあります。

4000年前に始まったカースト制度が、今でも現存しているということであります。カースト制度を撤廃したいということで、先ほども先生から名前が挙がりましたが、アンベードカルという方が出られました。彼もマハールという不可触民の家庭の生まれです。皆さん方がご存じなのは主に四つのカーストかと思いますが、これは縦社会のカーストであって横社会にもたくさんカーストがありますし、それが四つまではまだ人間として認められる。四つ以下になるともう文字通り不可触民ですから、その人に触るだけで、その人が汚れているだけでなくて、自分も汚れるということです。

同じように人間として生まれながらにも人間扱いを全く受けないという四つ以下のカースト、人として生まれながら人として扱ってもらえない不可触民というカースト。その中でもマハールというカーストがあります。アンベードカル博士はそのマハールというカーストの中で生まれられました。

このカーストというのは職業による差別です。バラモンですと宗教儀式をつかさどる。クシャトリアですと武士の役割をする。商業、工業の役割をその次の方たちがし、その四つのカーストの中の一番下が奴隷ということになりますが、奴隷以下にまだ不可触民という人たちがいて、アンベードカルという方はその不可触民のマハールというカーストの人です。アンベードカルのことを言うよりも私自身のことを言ったほうがいいかもしれませんが、私自身もマハールというカーストの一員です。そういったアンベードカル博士はマハールという家庭に生まれて、マハールが受けるべきありとあらゆる差別を受けました。

都会ではなくなりましたが、今でも不可触民といわれる人たちが、公共の井戸ですとか、

公共の水を得られる場所へ行って自分で水をくんではいけない。どうしてかというと、不可触民ですから、その人が水を触ることによって水が汚れる。水が汚れると、今度上位カーストの人たちがその水を飲むことになりますので、汚れた水を上位カーストの人が飲む、もしくは飲むことによって彼らも不可触民になる。あるいはその水が飲めなくなるということで、不可触民の人たちは、水すら、公共でありながらも飲ませてもらえなかった。

あるいは、まず学校に行くことが難しい状態であり、行ったところで他の学生たちと同じような環境の中で勉強させてもらえないという状況が、今でもあります。ほとんどなくなりましたが、全くなくなってしまったということではありません。

アンベードカル博士が生きておられた時代はそのことが顕著に表れました。マハールというカーストの職業は、身寄りのない遺体の片付けとか、持ち主のない死んだ家畜を片付けるとかいった活動をしながら生きていくということでした。そういうアンベードカル博士自身、差別の中でずっと生きてこられた。大きくなるにつれ、大変能力のある方でしたし、並々ならぬ努力をされた方でしたので、そういった本人の能力、あるいは精進が認められまして、外国への留学を許されることになりました。

これは本当に不可触民という立場であって、なかなかそういうことがない中で外国に行く縁をいただいてアメリカとイギリスに留学されまして、出た先の大学でいくつもの博士号をとって国に帰ってこられました。

外国へ行きますと、カースト制度というものが全く何の役にも立たない。自分の能力、努力のみが認められ、努力や能力によって自分の人生が決まるという現状を受け入れられ、それが外国であるにもかかわらず、自分の能力、あるいは努力を認めてくれる。しかし、外国でたくさん博士課程の称号をもらってインドに帰っても、インドという国は自分の能力、あるいは努力を認めてくれる国ではない。

外国からいただいた博士という称号がインドという国に帰りますとなんの役にも立たない。もともとの自分の生まれであるマハールというカーストがまず用をなす。お前の持っている博士号は何の役にも立たない。あなたはマハールという家庭の生まれだから、これからもずっとマハールとして生きていくべきだという風潮が、インドの風潮でした。

そういう外国の空気と母国の空気の差を感じまして、なんとかインドにおける差別撤廃をしたいということで、当初はヒンドゥー教の一員として差別撤廃の運動をされました。まずは水が飲めないということで、公共の池に行って、その池からみんなで水をくんで飲むということをされましたが、それも一時のことであって、長期的に許されたわけではありません。

たくさんの人が徒党を組んで行きますので、池を管理している人たちも怖くなって、はじめは水を飲ませてくれたのですが、その後に彼らが出ていくと、牛のふんですとか牛の尿ですとか、そういったヒンドゥー教において聖なるものを、そこにいくつもまくという儀式によって、マハールというカーストの人が汚した池を清浄にすると。そういうことが

当たり前に今でも行われている。

もう一つは、インドという国は宗教に対してものすごく、自分の人生の中から宗教を取ってしまうともう人生ではないくらいに、宗教に対して大きな思いを持っております。その当時、アンベードカル博士もヒンドゥー教の一員ですから、自分の徒弟を連れて同じヒンドゥー教だからヒンドゥー教のお寺の中で拝むことは当然のことだということで、たくさんの人たちとヒンドゥー教のお寺にお参りしに行ったのですが、それも許されない。

しかし、何回も何回も繰り返していると、やはり人数が多いものですから、いつの間にか許されたわけではありませんけれども、その場限りの入門として、お寺に入ることを許される。しかし、やはり彼らが出て行ってしまうとまた同じように牛のふんですとか尿ですとか、そういったもので汚れたお寺を清浄にする。

ヒンドゥー教の教義では、生きている人間よりも牛のふん尿のほうが尊ばれ、汚れを清浄にするという、そういう極端な環境をアンベードカル博士は自分の人生の中で受け入れています。自分の国にあっては不可触民として生き、外国に行っては一流の人間として認められる。その両極端な部分を彼は見ていきました。

その両極端な部分を見て、なんとか自分の国もカースト制度を撤廃した平等な国にならないかということで、いま申しましたようにお寺へ行くとか、あるいは公共の水を飲むとか、そういった社会活動をずっとしてこられましたが、それがまったくもって実を結ばないということになります。

考えますと、どうしてそれが実を結ばないかということですが、それはヒンドゥー教のマヌの法典という教典がありまして、マヌの法典の中に歴然としたカースト制の教義が含まれております。バラモンはこうであり不可触民はこうであらねばならない。それに反した人間はこういう罰を受けるというところまで書いてあります。

ですから、ヒンドゥー教という宗教の一員である限りはカースト制度の差別から出ることはできない。ヒンドゥー教の一員として生きていこうとすれば、カースト制を受け入れなければ、ヒンドゥー教の一員もしくはインド人として認知されない。いくら自分が社会改革、カースト制度の撤廃を訴えたところで、インドの国の建国の基礎になっているヒンドゥー教そのものがそういったカースト制度を認めているわけですから、カースト制度をヒンドゥー教のもとで撤廃することはできないだろうということで、いろいろな宗教の勉強をされました。

仏教だけではありません。ジャイナ教、シーク教、イスラム教、キリスト教等々たくさん、十数年にわたって、いくつもの宗教の勉強をされた。その最終的な段階で、仏教こそが自分がこれからインドのカースト制の撤廃、あるいは平等なる国を築き上げようとした場合に、他の宗教以上に、仏教が慈悲ですとか平等を重んじる宗教であるがために、今後のインド社会の改革、差別撤回につながるのではないかということで、1956年10月14日に50万人以上の人たちと一緒に、ご本人はもちろんのことですが、仏教に改宗されました。

それが昨今、いまとなっては、諸外国で言われているインドにおける仏教というのは、東ベンガルの仏教や北インドの仏教ではなく、57年前に再誕した、アンベードカル博士を中心にした仏教であるという認知になっているのではないかと思います。

そうやって大々的に仏教に改宗をしましたが、まずは形態を変えようと。ヒンドゥー教という形態から仏教という形態をまず受け入れようと。と言いますのは、その50万人の人たちの大半が宗教だけではなくて、社会的にも無知な人たちです。字が読めない、勉強なんてとんでもないという人たちでしたので、まずその仏教の思想、あるいは仏教の信仰を教えるよりは、宗教の形態を変えた後に、仏教の思想や信仰を徐々に伝えていくほうがいいのではないかという考えで、まず先に大々的に仏教に改宗されたわけです。けれども、2カ月弱でご本人が他界されてしまいました。彼の早期の他界が、今のインド仏教の一番大きな損失ではなかったかと思われます。

これから仏教の思想、信仰を広めていこうという大導師がなくなったわけですから、そのあとに続いた人たちも仏教に対してそれほど造詣があったわけではありません。アンベードカル博士個人が仏教に対しての造詣があったと同じように、彼の徒弟たちが仏教に対して造詣があったわけではありません。ですから、アンベードカル博士が亡くなった後は、どちらかといいますと社会的な仏教、あるいは政治的な感覚の中で使用、利用できる仏教がずっとこの五十数年の間に説かれてきたのではないかと思っております。

本来、アンベードカル自身がそれを願ったわけではありませんが、アンベードカル博士は長年、宗教活動をされるよりは社会活動、あるいは政治活動をしておられましたので、当たり前のごとく、徒弟たちも政治家であったり社会活動家であったわけですから、それほど仏教に造詣があったわけではありません。ですから、アンベードカル亡き後は、純粋な仏教がインドの中で根差したということではなくて、その徒弟たちの都合のいいように社会的な変容を遂げたり、あるいは政治的なことで利用されたにとどまっている状態であります。

アンベードカル博士は、ミャンマーの方を大導師にして改宗されたわけですけれども、その後のインド仏教は上座部仏教として成立しているのかというと、決してそうでもありません。一番力の大きいところでは、全インド僧伽教会というものがありまして、上座部系のお坊さん方の集まりです。この全インド僧伽協会というのは、一応、いまのインド仏教で一番大きな力を有している組織かと思います。

しかし、そのお坊さんの教会が社会の中で力を発揮できているか、あるいはお坊さんが説く宗教がインド仏教に根差しているかというと、これまた別問題であります。どちらかといいますと、お坊さん方の組織は儀式をつかさどる、冠婚葬祭の時に必要な宗教儀式をつかさどる方々になってしまっているのが現状であります。その中で、ではどういった方々が力を持っているかということですが、それは在家の方々です。

アンベードカル博士が書かれました、今のインド仏教、いわゆる新仏教徒のバイブルと

いわれますが、『ブッダとそのダンマ』という本があります。日本語でも訳されています。これを読んでいただくと分かるのですが、世界中どこへ行ってもシッダールタ、ブッダが宮殿を後にしたのは四門出遊ということになっております。生老病死という人間の根本的な原因を解決するためにシッダールタは宮殿を後にしたということになるのですが、アンベードカル博士は自分の著書の中で、その部分を全く彼の独特な感覚によって、シッダールタという方が宮殿を後にした原因を追究しております。

詳しいことは時間の関係でここでは申せませんが、また、本を読んでいただきたいです。アンベードカル博士は、シッダールタの出遊の原因は水問題だと言っております。川の水を二つの部族が、どちらが水をとるかということで対立をし、それがシッダールタにとっては大変な苦しみであったがために宮殿を後にしたと。

要するに、シッダールタが出遊したのは、生老病死という私たちが普段に言っておりますことが原因ではなくて、水問題が原因だった。いわゆる、私たちが宗教として捉える問題ではなくて、社会問題、カースト問題です。カースト問題の一番の象徴は、水です。水が飲めるかどうかというのがカースト問題の象徴ですので、アンベードカル博士にとりまして仏教というのはまず､インドのカースト制度というものを改革してくれる要素の多い、その中で水問題が大きな象徴的なことになりますので、シッダールタの出遊も生老病死ではなくて水問題だというふうに言っております。

そこで、インド仏教がどういうふうに進んでいったかということが、ここで厳然とうたわれているかと思います。アンベードカルの言うシッダールタの出遊の内容が、今のインド仏教の一つの道になっております。信仰的、宗教的に捉えるよりは、そのように社会的な風潮の中で捉えている感覚が大きいわけでして、信仰、宗教的な解脱ですとかそういったものよりは、現世で差別されている状況を回避してほしい。あるいはまた貧しい状況を何とかしてもらえないかという願いをもって仏教に改宗されたわけですが、そういった、在家の方々が望んでおられる願いをかなえられる要素を、僧侶はほとんど持ち合わせておりません。貧困問題に対して今のインド仏教の僧侶たちが力を持っているかというと、決してそうではありません。

そうなりますと、どういった方々の声が大きくなるかといいますと、経済的に力を持っている人、あるいは政治的、社会的に力をもっている人たちの声が大きくなります。その声によって仏教が左右されてしまうということになります。私の言うことを聞けばあなたに仕事を与えますよとか、私は仏教に対してこういう意見を持っている、これをあなたは受け入れることができたらこのような職業に就かせましょう、あるいはこのような経済的な優位性をあげましょうと言える立場にいる人、そういった力を持っている人たちの言うことが、今は仏教になってしまっております。いいかどうかは別問題ですが、これが現状です。

世界の中でも仏教というのは寛容な部分が多々ありますので、歴史的、伝統的に続いて

いる仏教がすべて同じかというとそうでもありません。日本の仏教、ビルマの仏教、タイの仏教、スリランカの仏教、チベットの仏教が違うと同じように、またもう一つ違った仏教がインドの中で発生する可能性は大いにあったと思います。

その基礎に、釈尊が説かれた部分があった上での新しい仏教ということであれば、全然問題ないのだと思います。しかしブッダの説かれた思想をもって仏教とするのではなくて、声を出せる人たちの都合のいいような仏教になってしまっては、ちょっともったいないかなと思っております。

ヒンドゥー教から仏教に改宗し、間もなくアンベードカルという方は他界され、その後、紆余曲折を経ながら、仏教は名前的には継続しております。私自身、そういった中で、私の比叡山延暦寺の師匠であります方が12年の籠山を終わられましてインドへ来られ、その間3年ほどインドにおられましたが、半年ほど私の実家で生活され、そのご縁で1971年から1985年までの約15年間、私は比叡山延暦寺でお世話になりました。

小学校からずっと、9歳で日本に来まして24歳まで日本にいたのですが、学校へ通わせていただき、それから師匠の比叡山での修行をさせていただいて、1985年にインドへ帰りました。15年間の比叡山の生活ですので、帰ったというよりは比叡山のお坊さんが1人、インドへ行ったという感覚ですけれども。言葉すら分からなくなっていましたし、日本に来た時にはインドの仏教の再興ということで比叡山にお世話していただいたのですが、インドに帰るときには全くインドの現状も分からず、インドの言葉も分からず、帰国というかたちで帰りました。

私たちが行ったころはまだ今ほど、インド仏教というのが定着まではいかなかった時代です。歴史がなかったわけではありませんが、まだまだどちらに行こうかという状態でした。私もそういう中でインドへ行きまして、何をするか全く分からない時代で暗中模索の状態でした。

小さなお寺を建てまして、そこを中心に仏教の活動をしようかということなのですが、全くもって形態がインドと日本で違います。仏教の僧俗がほぼ同じような状態で生きている。在家の方々と僧侶が同じレベル、同じ高さで生きているというのが私たちにとっては当たり前の状態ですが、インドの上座部仏教というのはそれを許しません。私たちはそれに慣れていませんので、なかなかそれにすらついていくことができない。

でもそれは民族の違いだと思います。僧俗が一体になっていく方式を受け入れやすい民族と、そうでなくて聖職者として一段上に立ってほしいと願う民族。上座部仏教というのは決してお坊さんのほうからだけではなくて、民衆からもそういう立場を求められています。僧侶が自分たちと同じレベルにいるのではなくて、やはり聖職者としての一面を持ち合わせていただいて、その中で仏教を教えてほしいという在家の方々の意向もあります。

そういう民族性ですので、日本の僧俗一体という風潮、そういう概念を持って行ったところで、これは受け入れがたいということで、私もいろいろ悩みまして、どういうことを

すればいいかということで考えました。

1985年のことですから、改宗してから二十数年間過ぎておりました。私自身は改宗の時に全く関係のない人間です。1962年生まれですので、改宗とは直接関係ありませんが、私の父親がアンベードカルという方の片腕になりまして、アンベードカル博士の社会的な活動、政治的な活動、特に宗教的な活動に関して片腕になって精進しておりましたので、そういう家庭で生まれ、そういう家庭の空気の中で生きてきました。しかし、直接インドの仏教と関係を持ったということではありません。

ですから、私のような異端児が中へ入っていって、直接インド社会に訴えるということはなかなか難しいものがありましたので、それよりは自分の禅定林というお寺の中で何らの活動ができないだろうかということで活動を始めたのですが、言葉も分からない、感情も分からないということで何をすればいいか。自分のレベルの人間をまず探しました。それが子どもです。子どもたちを預かって何らかの活動ができないだろうかということで、子どもたちの養育、子どもたちの教育のための活動をずっとさせていただいております。

それが仏教と直接関係するかどうかはこの先、結果が出た時点で見てみないと分からないのですが、私たちは子どもの時から仏教というものを、思想というより、仏教の日常、仏教の信仰といったことを伝えることができればそれに越したことがないのではないかということで、孤児院をやったり学校をやったり図書館をやったりと、どちらかというと社会的な活動をたくさんしております。

でも私にとりましては、それがインド仏教の再興、アンベードカルという方がともされた灯火を大きくする一つの方法になるのではないかと考えます。その中でも大乗仏教といいましょうか、私自身は大乗、小乗という壁はもうそろそろなくなってもいいのではないかと思います。大乗から見て上座部仏教のよからぬところはたくさんありますし、逆に小乗から見て、上座部仏教から見て、大乗仏教のここはおかしいのではないかと、私自身、両方の中で生きておりますので、お互いにそういうものを持っているのではないかと思います。

ここ何十年間も私たちはそうやってお互いにずっと批判している。大乗仏教はこれがよくない、小乗仏教はこれがよくないとお互いに自分こそが仏教徒だということで、自分が信仰している形態の仏教だけが仏教だということで、長年お互いにいびつな関係を作り上げてきたのではないかと思います。現在、この世の中において、もうインドと日本は8時間、10時間もあれば行き来できるような状態の中にあって、いまさら上座部だ、大乗だということを言うほうがもうおかしいのではないかと思います。

大乗仏教の本義である「上求菩提・下化衆生」と衆生に対しての教化活動を、私たち大乗仏教以上に長らくしておられる上座部の僧侶方もたくさんおられます。私たちは、はばかられる大乗ということで、彼らの現状を見て恥ずかしいと思うことすらあります。逆に、上座部仏教の方々が戒律を守らないほど、実際の戒律ではありませんが、精神的な部分で

の戒律という法を私たちのほうが守っているのではないかと思うことも多々あります。

そういう、両方ともに逆の面が出ていることもないわけではありませんので、今後、私の立場は、そういった大乗、あるいは小乗ということを批判することなく、もともとはお釈迦さんから出たものです。もちろん、そこに返ることもなかなかできないとは思います。日本には日本の形態があり、インドにはインドの形態があります。しかしその中で、同心円として二つの円がどこかで相交える部分があるのではないか。私自身がその同心円が相交わった結果をいま出しているわけではありませんが、それをいま模索中であります。

自分の活動、そういった見た目の社会活動、あるいは村を回り、たくさんのところへ回り、これから3カ月間安居に入ります。実際にも昔のような安居を私はしているわけではありませんが、村々を回り、村々の中で教化活動をする。その村に数日間泊まり込んで午前中は自分の僧侶としての修行を積み、午後からは村人たちの教化に努めるというその現場にいる限りは、3カ月間同じようなことをしています。

そういう仏教をこれから問うていきたいと思うのですが、いまのインド仏教というのは、どちらかといいますと、社会や政治に利用された状態での仏教ではないかという自覚です。その中で、決してそこに作為があったわけではありませんが、アンベードカルという方についていった方の大半がマハールという人たちでした。最近マハールでない人たちも少しずつは増えておりますが、9割9分がマハールです。

それからインドの戸籍調査の結果、12億人を超えた状態で0.8％が仏教徒だということですが、これはちょっと違うと思います。実際には戸籍調査の時の複雑なシステムがありまして、宗教を書くところ、自分のカーストを書くところ、いろいろな項目がありましてその中で真っ先に出てくるのは宗教を書くところです。その宗教のところに、先に出てくるのがカーストを書くところ、その次が宗教を書くところです。

カーストのところにマハールと書くと、マハールというのはヒンドゥー教の一つですから、マハールということを書くことによって、その人はヒンドゥー教の一員として数に数えられるということです。どうしてマハールということを書くかということですが、カーストの中にいま優遇されるカースト、指定カーストというものがあって、マハールと書くことによって指定カーストの優遇制、教育に関して、あるいは就職のときの優遇制を得られますので、カーストのところにマハールと書きます。

本来は法律では新仏教徒と書いても同じような優遇措置が得られるわけなのですが、いつその法律が変わってしまうかもわからないという恐怖心もありますために、いまだにマハールと書く方たちが大半です。そのマハールという項目に名前を書くと、当たり前にヒンドゥー教として数えられ、あとで仏教と書いたところでそれは何の役にも立たない。

そのマハールということではなくて、そのあとの宗教で「仏教」と書いた人たちが0.8％ということになります。マハールと書いても実際にはアンベードカルの思想を受け継ぎ、家の中では仏教徒だと誇りをもって生きている人たちがおりますが、そういった人たちも

マハールと書くことによってヒンドゥー教と数えられる。私たちが実際にインドで布教をしていますと、2500万人から3000万人、ですから0.7％ではなくて3％以上の人口が、戸籍ではなくて実際に仏教を信仰している人たちではないかと思います。

この50年の間に少しずつ増えているのですが、その増えた数字というのは、よそから入ってきた方たちという数字ではありません。よそから改宗して仏教徒が増えたという数字ではなくて、人口増加による仏教の増加であります。よそから入ってきた人と、すでにもうキリスト教ですとかヒンドゥー教に戻った人たちもいますので、そういった数字を考えますと、この50年の間、仏教徒の人口がそれほど増えたとか減ったということではないかと思います。

どうしてそういうことになるのかということですが、一つには政治や社会と仏教ということが混同されてしまっています。仏教が独立した状態でインドの中で生きていないというのが、私は今後のインド仏教の中における一番危険な状態ではないかと思います。政治家あるいは社会活動家の人たちのための仏教になってしまっている仏教ですから、仏教そのものが独自性、独立した運動、活動を持っていないがために、これからのインド仏教の将来というものは危ぶまれる部分は多々あるかと思います。

やはりインドの人たちが仏教というものを独立した状態で、社会、あるいは政治に左右されないものにしていかないことには、今後のインド仏教というのは基礎を持った上の仏教ではなくて、戒定慧という基礎すらない仏教に変わってしまい、仏教なのか社会なのか宗教なのか政治なのか、それが分からなくなってしまうのではないかという危惧があります。

そういった中で私たちは、社会あるいは政治が不要ということではありません。今のインド仏教の人たちは貧しい状態で、社会的な力も持っていませんので、そういった社会、政治が不要ということではありません。しかし、なんとか仏教というものが独立した状態で、戒定慧をもって、あるいは大乗小乗の垣根を超えた大乗小乗の同心円を持った状態で、インドの中で仏教を問うていきたいと思っております。

私が日本に来た数日前に、ブッダガヤで大変な問題が起こりました。ブッダガヤの街頭で連続して爆破事件が起こりました。これもやはり仏教の希薄な部分が出てきたのではないかと思います。今後は仏教が、インドの仏教だ、日本の仏教だということではなくて、キリスト教、あるいはイスラム教というのは、世界中のイスラム教、世界中のキリスト教だというのと同じように、どこそこの国の仏教という概念ではなくて、世界における仏教という概念をもって、そしてまた社会、政治に左右されない仏教が今後、世界中に広まることの必要性をつくづく感じております。

私が今日、ここに来させていただきましたのは、本当に仏教の研究の権威がたくさんおられる中、私はお話しするような立場ではないのですが、少しでもインドの仏教をご理解いただきまして、今後、インドの仏教をいま以上に、本来の仏教が根付く状況を私たちが

作っていくためにも、ここにおられる先生方の研究、思想といったものを私自身が受け入れたいなと思ったからです。

時間になりましたのでインド仏教のほんのわずかな歴史、あるいは現状、そして私たちが今後どういった方向に仏教を持っていきたいのかということを、かいつまんでではありますがお話をさせていただきました。

本日は本当に私のような人間が、このような研究の場の高いところに上がらせていただいてお話をさせてくださる機会を設けていただきました龍谷大学の皆様に御礼を申し上げますとともに、ご清聴いただきましたことに御礼申し上げまして話を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。